

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成30年12月号

平成三十年十二月一日発行 第二十八卷第十二号 通巻第三三〇号 (毎月一回一日発行)  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

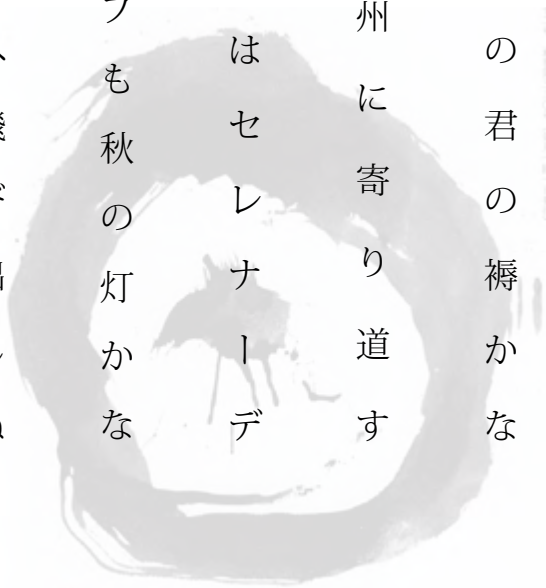


# アラジンのランプ

高橋将夫

た  
ま  
の  
を  
は  
心  
の  
中  
に  
咲  
く  
花  
よ  
  
鈴  
虫  
の  
音  
を  
松  
虫  
は  
知  
つ  
て  
を  
り  
  
夜  
盗  
虫  
砂  
の  
か  
け  
ら  
を  
盗  
み  
け  
り  
  
難  
民  
も  
連  
れ  
て  
行  
か  
う  
か  
渡  
り  
鳥

不死鳥座あるかも知れぬ天の川  
七癖の一つなくなり行く秋ぞ  
ちちろ鳴く源氏の君の褥かな  
流燈の一つ中州に寄り道す  
秋の蝶最期の舞はセレナーデ  
アラジンのランプも秋の灯かな  
流れ星宇宙の外へ飛び出しぬ



# 槐安集

水野恒彦

秋うららけふ私は印象派  
秋蝶やカガイ耀歌の山の風に舞ふ  
星流る大宇宙の呼吸かな  
一人より独りにかへる秋の夜  
枯蠟螂カントの貌である様な

加藤みき

稔り田が塞き止めてゐる山崩れ  
弁当を食べて落着く運動会  
半ばまで赤く染まりし秋の滝  
如何ドウしても伝へたきこと曼珠沙華  
秋夕焼何の鳥かや過りたる

中島陽華

呼ぶ声や白桃しかと熟れてをり  
これはこれは笑ふほかなき大暑かな  
草雲雀薬戴く日なりけり  
法の声那智大瀧となりにけり  
北齋や姉さかぶりで汗拭いて

竹内悦子

星四つ並ぶ真夏の大舞台  
壺に耳鼻のあたまに玉の汗  
揚花火交響曲五番運命  
虫の声傘すぼめをるところかな  
極楽や九月の風をよろこびぬ



雨村敏子

別天地へ我へ九月の船を出す  
紙箱の中は空つぽ神渡し  
同行二人菊の日の菊を見に  
水に置く姫冬瓜の窪みかな  
槐と大書して月光に晒さるる

近藤喜子

ちひろ画集ぬけ出てきたる小鳥かな  
くれなゐに寂しさ隠す天狗茸  
精霊の囁き霧の流れけり  
此の世とも彼の世とも深き芒野  
まるで縄文のヴィーナスこの瓢

本多俊子

石榴の実置けば独り夜とならず  
秋の朝五感を染むる海の青  
枯芭蕉たましひありてそよぎけり  
撫子や真水のやうな言葉受く  
スープレ待つ静かな心草雲雀

瀬川公馨

白帝の白亜の城を出でにけり  
狐火のやうに灯さむ処世術  
椋大樹白頭翁のお邸よ  
一滴眺え向きや草の露  
里山を出で入りしたる尉鷄

柳川 晋

虚栗といへどこんなによくては  
平 清 盛 九 百 歳 の 秋  
月影の一角獣といふリアル  
雨を呼ぶ森の菌の苦笑ひ  
リア充といふのださうだ爽やかに

熊川 暁子

秋風や水ゆくごとく身を運ぶ  
今朝ひらく言の葉ひとつ草もみぢ  
白萩の鼓動を胸へ抱き起こす  
世界中に一本流る天の川  
秋灯しわが影我にさからはず

岩下 芳子

桐一葉も残さず駅前開発す  
大地震に自ら崩る秋の山  
青信号を渡り切つたる子蠅螂  
ここからは歩幅小さく登高す  
大淀を隈なく照らす土手の月

有松 洋子

良寛の庵おとなふ玉兔かな  
結界をすいと破りし秋茜  
露草が小さき空を産みおとす  
雨月かな禁を犯すはこんな夜  
花野中たましひ一つ落ちてゐる

岩月優美子

風の百態ひそみたる厄日かな  
一指より太古の水の冷やかに  
靈山の一滴やがて秋の川  
抛り所求め花野へ来てしまふ  
長き夜の脳裏かすめる過客かな

近藤紀子

夏休み果ててピカピカ登校す  
槌音や秋空日々に挟まれる  
赤とんぼ触れば目病む言ひ伝へ  
星流るああと叫んでそれつきり  
半世紀の思慕運び来る萩の風

竹中一花

火祭やちりめん山椒炊いてをる  
漢<sup>かん</sup>方<sup>ぽう</sup>薬の金字看板秋揺るる  
新しき秋風に置く五體かな  
竜淵に潜るや松の空濁る  
爽やかを着る弥陀佛の黒衣

前田美恵子

不知火や身を寄せ合ひし虚貝  
四方に風抜けて秋冷陽明門  
天高しトランポリンの空中技  
漱石の猫が隠るる草の花  
秋草の丈は短かし関ヶ原

中田禎子

鬼灯や鏡の中のもう一人  
染付の皿にノドグロ無月かな  
尉面や月の裏側のつぺらぼう  
三日月や日は一年を丸き顔  
桃源や黎の杖の後ろゆく

吉田順子

天と地の中に息して彼岸花  
束の間の秋夕焼やハーモニカ  
竹林のひかり斑に風炉名残  
初紅葉木霊は空に帰りけり  
一湾を隅なく照らす望の月





# 槐市集

田中美恵子

星影や刻みおくらのスープかな  
地藏盆眉は円かに微笑する  
月光の苔を照らしてをりにける  
夢うつつに聞いてをりけり虫の声  
銀漢に包まれてをる曾爾の村

時 澤 藍

露草やおしやれに余念なかりけり  
虫すだく闇の世界の深さかな  
つま先の蹴つて集める栗の毬  
雲かかれども中秋の月は月  
紅葉の先頭に立つ紅チガヤ

中 貞 子

今朝の気や金風よぎる響きある  
水引の鶴飛びたがる秋の空  
新米の手ざはり先祖に遇ふごとし  
昼と夜を仕切つてゐたる曼珠沙華  
こんな時だから唄おう星月夜

中 島 昌 子

秋はもう厨の隅に足元に  
バス停にいつもの顔や涼新た  
銀閣の空に手を入れ松手入  
萩の風こんがらがりて抜け出せぬ  
菊の酒猪口三杯の酔ひでよし



中谷富子

菊酒を酌みかはすことなき別れ  
炎天やさるすべりの花衰へず  
湯浴みする音高々と野分あと  
リボンつく箱から帽子敬老日  
我が庭に狸出てくる十三夜

中西厚子

赤<sup>あかえんば</sup>卒 喪服の裾を掠めをる  
澱み無く初秋の朝を迎へをる  
秋めくや埴輪の目から光漏る  
球審の目の前過ぎる秋の蝶  
雑草の地にへばり付く台風一過

中堀倫子

今日の月ラグビーボールの形をして  
台風裡保険証書をみてゐたり  
稲の花エリートコースあゆむらむ  
ごそごそと何やら奥で竹の春  
ちびつこの忍者姿や地藏盆

橋本順子

盆すぎの草に雨ふる目覚めかな  
夕刊の<sup>浜風</sup>とどいてをりぬ野分中  
錆浮かべよどみたる水秋暑し  
コップの曇り取つてをり九月なり  
法師蟬門を出でずに鳴きにけり

平野多聞

精霊舟時の流れを惜しみけり  
放屁虫知り尽さずに共にをる  
軒先のほど良き暗さ風の船  
当り前に生きてるつもりいぼむしり  
七十路を自在に生きて秋刀魚食ふ

藤田美耶子

星くずの闇にしめやか祭笛  
銀漢にかなわぬ恋を星の砂  
鶏頭や無頼に生きることもなく  
蟬穴に大小なくて静まりぬ  
秋風やよすが忍べぬ芭蕉の碑

# 槐集

## 高橋将夫選

秋夕焼核のボタンは金メッキ  
大阪 平野 多聞

一斉に光る朝露みなクロン  
守口 三木 亨

菊人形殿も御供も枯れ始む  
秋扇時の流れの音疊む

蝻螭斬首の音を声にせり  
蜉蝣や一夜の恋はただ無言  
大股を見つけ秋の蚊深呼吸

浮雲の青色青光秋日燦  
へのへのも生死流転の捨案山子

触れられぬ事が仕合せ親無子  
大空と大地を駆けて夏がゆく  
恋におち愛に溺れて蟬が逝く  
お互ひにちよつぱり甘へ秋なすび  
青葉中阿弥陀三尊浮かびをり  
あかあかと尾灯連ねて盆離郷  
アダムとイブイブの反乱青リンゴ  
アポロンのお出まし九月風てをり  
鬼やんま胸あつくなる出会ひなり  
すいつちよのちよんと私を喜ばす  
金風や大鯉ズイと寄りて来し

江島 照美

八尾 竹村 淳

思秋期の無口な少女衣被  
秋の夜や音の海へと泳ぎ出す  
火の国の女を秘むる汀女の忌  
星月夜大往生の門出かな  
水澄むや仏の眼なほ澄みぬ  
積年の夢かなひしや蟬の殻  
石榴割れ日常にある狂気かな  
風を読みかなたをめざす草の絮  
余生また熱き続編酔芙蓉

藤田美耶子

竹原 久保 夢女

# 銀河往來

## ◆槐集観照

七夕焼核のボタンは金メッキ 平野 多聞

人類の運命に係わる核のボタンが金メッキとはなんともしニカル。大事なものは見栄えではない。パフォーマンスでもない。

〈秋扇時の流れの音畳む〉は、「時の流れの音畳む」の調べがまことに美しい。

〈浮雲の青色青光秋日燦〉は見事な写生。浮雲は白というより青みがかって見えたという。

〈菊人形殿も御供も枯れ始む〉の句、枯れる時は確かに殿も家来も一緒なのだ。へへのへへのもの捨案山子↓の句「生死流転」と捨案山子とのギャップが愉快。どちらも俳諧。

言葉にも人にも死あり秋夕焼 江島 照美  
使われなくなつて静かな眠りに入る言葉がある。人はこれを死語という。最期は秋夕焼のごとく。

〈秋の夜や音の海へと泳ぎ出す〉の句、秋の夜には虫時雨や淋しい風音や蚯蚓の鳴く声など、いわゆる「秋の声」がする。それを作者は「音の海へと泳ぎ出す」と詠む。古典の世界からロマンの世界への進化。

〈思秋期の無口な少女衣被〉は「思秋期」と「衣被」の取り合わせが興味深い。

石榴割れ日常にある狂気かな 藤田美耶子  
「日常にある狂気」は唐突な表現に見えるが決してそうでは

ない。テレビのニュースでも狂気としか思えない事件がなんと多いことか。

〈水澄むや仏の眼なほ澄みぬ〉の句を見ていると、最も澄んでいるのは作者の眼のように思えてくる。

一斉に光る朝露みなクロン 三木 亨

どれも同じような朝露を羊のクロンと同列に置いたところがいかにもこの作者らしい。もちろん、露に遣伝子はないが。

〈螽斯斬首の音を声にせり〉の「螽斯の音」と「斬首の音」の取り合わせもユニーク。

〈触れられぬ事が仕合せ親無子〉の親無子は糞虫。なるほどと思う。

恋におち愛に溺れて蟬が逝く 竹村 淳

蟬の短い命の賛歌。人の世もまた。へお互ひにちよつびり甘へ秋なすびもまた愛の一面をとらえた一句。

〈大空と大地を駆けて夏がゆく〉の句、逝く夏がおおらかに詠まれている。

すいつちよのちよんと私を喜ばす 久保 夢女

馬追の鳴く音を楽しんでいる作者。リズムがいい。

名月の裏を見たくて遠まはり 井上 静子

遠回りしても月の裏など見えないが、そんな気持になるほど月がきれいだったのだ。月がとっても青いから……。